

令和4年度 全国学力学習状況調査の結果・考察

京都市立向島秀蓮小中学校

校長 上野 政弘

4月19日に、本校6年生・9年生を対象に実施された「全国学力 学習状況調査」について、結果がまとまりましたのでお知らせいたします。本調査は、国語、算数・数学、理科の3教科のテストと同時に、家庭での過ごし方や学習時間を問う調査も実施されており、生活習慣と学力との関係など、本校の子どもたちの状況をお伝えします。

前期課程 6 年生

国語

全体では、全国平均をやや下回る結果となりました。学習指導要領の内容ごとに見てみると、知識及び技能の「言葉の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」思考力、判断力、表現力等の「話すこと・聞くこと」「読むこと」といった部分で全国平均を下回っています。いっぽうで、思考力、判断力、表現力等の「書くこと」については、全国平均を大きく上回る結果となりました。このことは、問題形式別の正答率でも顕著に表れており、記述式の問題については、全国平均を上回る正答率にも関わらず、特に選択式の問題での正答率が低い傾向が見られました。

6年生になってからの授業では、対話によって考えを深める力や読み取ったことを説明する力についてアプローチする授業を行ってきました。今後は、情報を比較、精査し判断する力を伸ばしていく学習によって、課題を克服していくが必要になると考えられます。選択を迫るような問いや、適切な根拠を精査するような活動に取り組むことで、得意の「書くこと」とも連携した指導を行いたいと考えています。また、知識及び技能の部分にもアプローチするために、向島漢字検定(ムカカン)も試験的に実施しました。このような取り組みを通して、得た知識を活用・応用する必要性に駆られる場面を設定していこうと計画しています。

算数

領域別・観点別ともに全国平均を下回る結果でした。領域別では「図形」「データの活用」の領域が全国平均を大きく下回り、「数と計算」「変化と関係」の領域は全国平均よりやや低い結果となりました。

「データの活用」では、表の意味を理解して空欄になっている部分に当てはまる数を答えたり、目的に応じたグラフを選んでデータを読み取ったりする知識・技能を問う観点の問題では、ほぼ全国平均に等しい結果でした。しかし、分類整理されたデータを基に、目的に応じてデータの特徴を捉え考察するという思考・判断・表現の力を見る問題では著しく低い結果でした。

「図形」では、図形の意味や性質を基に図形をかくプログラムについての問題で、プログラムを修正したり、プログラムで示された手順で書いた図形を求めたりする思考・判断・表現の力を見る問題で大きく平均を下回る結果でした。

算数科では、思考・判断・表現の力を伸ばすために、「なぜ?」の問いを大事にして答えだけでなく求めた式や考え方を必ず答えられるようにしています。さらに、ペア学習やグループ学習を取り入れた問題解決の取組を行い、他の人の意見や考えを聞いて自分の考えを見直したり深めたり、また、自分の考えを他の人に説明したり伝えたりする中で、理由や根拠を基に他の人に説明させたりする等、根拠を持って伝える力を育てています。今後も、後期課程の数学にスムーズにつながるように、自分の考えを持ち、相手にわかりやすく表現し伝えられるような力を身につける学習を進めていきたいと思っています。

理科

全体では、全国平均をやや下回る結果となりました。学習指導要領の内容ごとに見てみると、『粒子を柱とする領域』は全国平均より上回っており、『エネルギーを柱とする領域』『生命を柱とする領域』『地球を柱とする領域』は全国平均を下回る結果となりました。

『粒子を柱とする領域』では、メスシリンダーの器具名や使い方を問う問題で全国平均を上回る結果となりました。実験・観察を繰り返して行ったり、一人ひとりが実験・観察を行う時間を十分に確保したりすることを大切にしていることの効果であると考えています。

『生命を柱とする領域』では、ナナホシテントウの育ち方について自分の観察の記録と新たに追加された他者の観察を基に学習問題に対するまとめを見直すことについて問う問題の正答率が全国平均よりも下回っていました。また、「粒子を柱とする領域」では、水を凍らせた物と砂糖水を凍らせたものの紅茶や水に対する現象を見て得た情報を、他者の気付きの視点で分析し、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できるかを問う問題の正答率も全国平均よりも下回っていました。どちらの問題でも、自分の気付きや考えだけではなく、他者の視点、複数の視点から得た情報を的確に読み取り、自分の考えを再構成することを求められています。本校では習得すべき知識を事前に家庭で学習してくる反転学習を進めています。反転学習を行うことで確保できる時間を、実験・観察の結果をもとに考察し、他者と協働し、他者の考えを活用しながら、もう一度、自分の考察を追記・修正する時間にあてるようにするなど、より妥当な考えをもつことを目指す学習を進めていきたいと思っています。

国語

国語の平均正答率は、全国と比較すると下回る結果でした。しかし、領域別・観点別で見ると、全国平均を大きく上回るものもありました。例えば、『話す・聞く』の領域で出題された「話の進め方のよさを具体的に説明したものとして適切なものを選択できるかどうかを思考・判断・表現の観点で問う選択肢の問題でしたが、これはかなり高い正答率でした。また、同じ領域にある「スピーチのどの部分をどのように工夫して話すか」と「そう話す意図」を説明する記述式の問題においても、高い正答率でした。

しかし一方で、「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうか」を問う記述式の問題においては、全国平均より大きく下回る結果となりました。生徒の答えを見ると、資料の一部から適切な情報を抜き出し、自身の考えを書き加えるという考えの形成はできているものの、知識・技能の領域で問われる「引用の仕方や出典の示し方」という情報整理において誤答が多いことがわかりました。同様に、知識・技能の観点における「表現の技法」を理解し活用することを問う問題においては、選択肢にある同じ表現を捉えることはできていますが、「比喩」という言葉と結びつけ、表現の技法を理解することに課題が見られました。

国語科では、単元の終末ごとに「対話」を通して、学びを深める機会を定期的に設けています。始めた頃に比べて、話し手の意図を汲むことや、自身の考えをわかりやすく伝える工夫ができるようになってきています。しかし、相手と合意を形成するために必要な根拠や理由においては、まだまだ課題が残ります。また、単元を通して、「自分ならどうするだろう。」と思い悩む課題を設定していくことで、知識・技能を自ら獲得していく仕掛けづくりや、自ら表現する力を育成していきたいと考えています。

数学

領域別・観点別ともに全国平均を下回る結果でした。領域別では「数と式」、「図形」の領域が全国平均を大きく下回り、「データの活用」の領域は全国平均よりやや低い結果でした。

「データの活用」では、新学習指導要領に新しく導入された「箱ひげ図」の問題が出題されました。箱ひげ図の分布の特徴を読み取ることができるかどうかを知識・技能の観点で問う選択制の問題でしたが、これはかなり高い正答率でした。「データの活用」の領域では他に、ヒストグラムの問題も出題されました。この問題は記述式の問題で、ヒストグラムを読み取って、判断の理由について根拠を記述するという、観点としては思考・判断・表現の力をみる問題です。生徒の答をみると、ヒストグラムから読み取れることを記述しているが、それが説明に必要な根拠となっていない、という誤答が多いことがわかりました。同様に、「数と式」・「図形」の領域の問題においても、筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明（証明）する記述式問題の正答率がどれも特に低く、このことから本校の生徒の課題が見えてきます。今後、「説明に必要な根拠は何かを考えて、的確に表現する力」を伸ばすことが大切です。

数学科では、レポート課題で、「説明に必要な根拠は何かを考えて、的確に表現」する機会を定期的に設けています。始めに比べて、かなり多くの生徒が記述できるようになりましたが、説明に必要な根拠は何かを考えて記述できる生徒はまだ多くありません。仲間のレポート内容を見て考えを広げることができるようにレポートを掲示したり、グループ学習で説明する機会をもったりなどして、根拠をもとに的確に表現する力を育てていきたいと考えています。

理科

全体では、全国平均をやや下回る結果となりました。学習指導要領の領域ごとに見てみると、『エネルギーを柱とする領域』は全国平均に迫る結果となり、『生命を柱とする領域』と『粒子を柱とする領域』は全国平均を大きく下回る結果となりました。

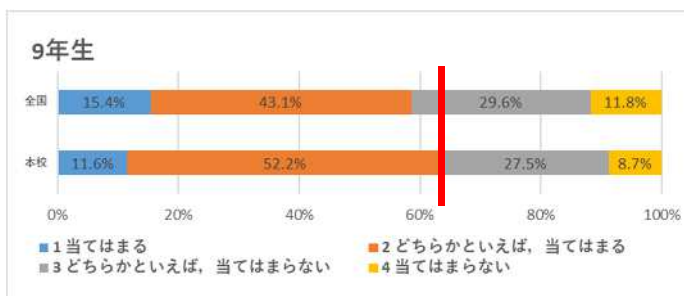
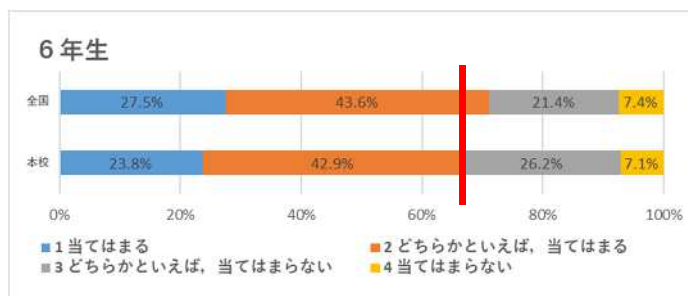
『エネルギーを柱とする領域』では、磁気ばねについての実験結果から、考察の妥当性を高めるために、測定値の増やし方について、測定範囲と刻み幅の視点から実験の計画を検討し、改善策を記述式で解答する問題が出題され、全国平均を大きく上回る結果となりました。観察・実験の結果から考察する場面を十分に確保することで、他者と協働し、関連付けて考えられた結果であると考えています。しかし、同じ問題での無回答の割合も多いため、粘り強く試行錯誤する場面や、自らの学習を自己調整する姿をレポートや振り返りへ記述することを大切にしていきたいと考えています。

『粒子を柱とする領域』では、化学変化に関する知識及び技能を活用して、水素の燃焼を分子のモデルで表した図を基に化学反応式で表すことができるかという問題、『生命を柱とする領域』では、アリの行列のつくり方を探究する場面において、視覚による情報を基に行列をつくるかを調べた実験の結果を分析して解釈し、課題に正対した考察を行うことができるかという問題が出題され、全国平均を大きく下回る結果となりました。

理科では、反転学習を行うことで確保できる時間を、観察・実験の結果をもとに考察し、他者と協働し、他者の考えを活用しながら、もう一度、自分の考察を追記・修正する時間にあてるようにするなど、より妥当な考えをもつことを目指す学習を進めていきたいと考えています。

生徒質問紙調査から

→Q:家で自分で計画を立てて勉強していますか。



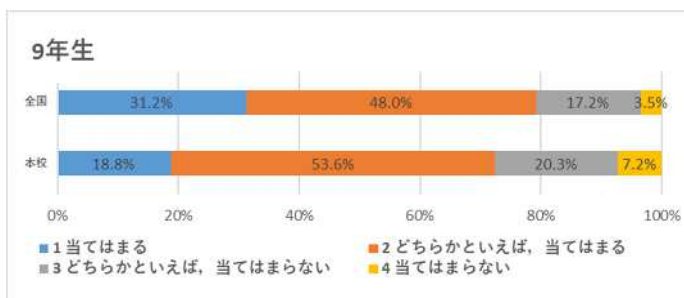
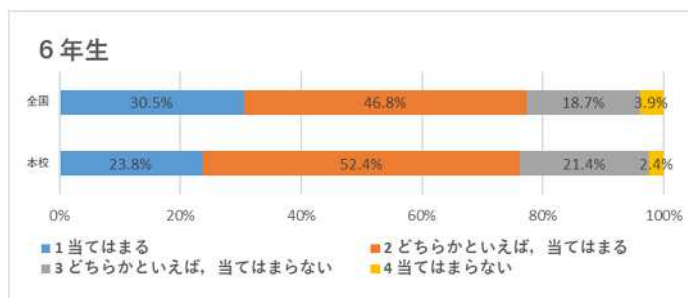
「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。」については、6年生は全国平均に比べ、やや下回る結果でしたが、9年生においては、大きく上回る結果となりました。これまで生徒が「与えられた課題に取り組む」いわゆる「宿題」と言われる受動的な家庭学習スタイルからの脱却を目指しています。そこで、能動的に取り組むことができる家庭学習に向け、自身で課題を選び、判断し、考え、決定できる学習として「自学自習シート」の取組を始めています。この家庭学習の改善が、「自分で勉強している。」という生徒の実感につながっていると考えられます。

しかし一方で、「1日あたりの学習時間・学習量」においては、全国と比較すると、まだまだ課題が残るのも確かです。今後は日々の授業形態と生徒が家庭で取り組む学習形態とのつながりを改めて見直すことで、生徒が受ける学校での授業と、生徒が取り組む家庭での学習内容の一体化を目指していきたいと考えています。これは、今年度本校において研究を進めている反転学習を取り入れた授業形態とも関連しています。この家庭学習への働きかけが、授業での生徒同士の学び合い、高め合い、励まし合い、認め合う学習活動とつながり、ひいてはその活動が「主体的な学びの実現」につながるものだと考えています。

生徒質問紙調査から

→Q.(児童質問紙)5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。

(生徒質問紙)1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自ら取り組んでいましたか。



「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」については、6年生・9年生ともに全国平均を下回る結果となりました。生徒は、授業内で取り組む課題に対し、見通しを持ったり、自分と結び付けたりしながら、課題解決に向け、取り組んでいるという実感が低いことが考えられます。いわゆる「主体性」として捉えるのでは、今回の結果には課題が残るのではないのでしょうか？教科における質問の回答を見ると、「勉強は大切だと思う」や「将来役に立つと思う」など、肯定的に捉えている生徒が多い。それらの結果を踏まえると、実際の行動につなげることができていないという課題が見えてきました。今後は、「自ら学ぶ力」に重点を置き、「自分はできる」という自己効力感や「〇〇を頑張りたい。」といった意欲など、学習を進めるにあたってのエネルギーとなる心の働きを高めると同時に、効果的な学習を進めるための工夫や方法、「自分は何を理解していて、何が苦手なのか」を、正確に捉え、学ぶべき箇所を明確にする力の3点に着目し、授業と家庭での学びを改善していきたいと考えています。